【148】

氏　名（本　籍）	大崎節郎（宮城県）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	博　乙　第　497　号
学位授与年月日	平成元年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	カール・バルトのローマ書研究

主　査	筑波大学教授	文学博士	小川圭治
副　査	筑波大学教授		荒木美智雄
副　査	筑波大学教授	文学博士	川崎信定
副　査	筑波大学教授		柳沼重剛

論　文　の　要　旨

本論文は，現代のもっとも代表的なプロテスタントの神学者カール・バルトの最初のまとまった著書であり，その後の彼の思想の発展の出発点となり，また「弁証法神学」と呼ばれる新しい運動の発端となった『ローマ書』（Römerbrief）（通称『ローマ書講解』）についての神学思想史的な研究である。

本書については第一版（1919年），第二版（1922年）出版後，日本においても注目され，すでに1920年代後半には，「危機神学」の代表的著作として三木清らによって紹介され，1930年代に入ると丸川仁夫の抄訳が，1950年代には吉村善夫の完訳（上・下二巻）が出され，また1960年代に小川圭治・岩波哲男共訳が出された。このように広く読まれてはきたが，本論文の「序章」で著者が言っているように，芸術の世界における「印象主義」を越えて現われた「表現主義」に近い（13頁）という本書の独特な，したがって非常に難解な表現のために，部分的な引用や言及は広く行われてきたが，全体としての本書を分析研究するといった研究は，今日まで日本においては現われなかった。欧米においても，本論文が取り上げて紹介したごく最近の研究に，はじめて全体を正面から論じるものが出るようになった。本論文は，このような困難なテーマに立ち向かった日本における最初の広汎な研究である。

序章では，まずバルトの『ローマ書』の成立の背景となった20世紀初頭のヨーロッパの思想史的状況をたどり，その中で著者バルトが，どのような流れに沿って，その思想を形成してきたかが解明されている。さらに『ローマ書』第一版と第二版が出たのちの思想界・神学界の反響がたどられる。つづいて第一版と第二版の違いの問題が取上げられる。表現の上では，全く別の二つの著作と

見られるほど違っているが，しかし，その基本的な立場は一貫して変わっていない。したがって「同じ主題的内容の明確化と徹底化のための…前進」(28頁) だと考えている。そこから，この二つの版を，一まとめにし，主として第二版を中心に論じるという本論文の方法論が明らかにされる。とくに本論文が採用した「解釈の方法」は，「神学史的連関における考察」だといわれる (36頁)。この方法にもとづいて，特にドイツを中心にほとんどすべてのドイツ語での研究論文をとり上げ，英・仏語のものを含めて，今日およそ入手可能な文献全体が検討されることになった。この点は本論文の学問的成果としての重要性を支える一つの主要点である。それは本書の豊富で精細な注記にはっきりと表われている。

第一部「主題」では，『ローマ書』の第一版ですでにとらえられ，第二版ではより明確な形で示された「主題」の内容が明らかにされる。本論の原理的出発点であるとともに，結論を前以て提示した部分である。第一部は二つの章によって構成されているが，第一章「神の神性」では『ローマ書』の主題とは，S・キルケゴールの「神と人間の無限の質的再」を「思考方式」とする「神の神性」，つまり「神は神である」とのテーゼの「把握」と「解明」であるという (68頁以下，486頁)。すなわち「神の絶対的超越性」，「神の神性の再発見」が主題なのである (61頁以下)。第二章「永遠の瞬間」では，さらにこの「神の神性」が，「永遠の瞬間」，「永遠の今」，あるいは「希望の現実」へと積極的に展開することが示される (99頁以下)。この「復活の未来」の理解から，P・テッリッヒとF・ゴーガルテンの神学的基礎図式が批判的にルヴュされる (105頁以下)。このように明確にされた「主題」が，時代の問題，第一次世界大戦前後の状況からの問いとの対決によって展開されるのが第二部以下の論述である。

第二部「宗教批判」では，「近代自由主義神学」の宗教理解，つまり「宗教的人間中心主義」としての「宗教主義」に対する「自覚的かつ徹底的な批判的作業」が「宗教批判」という形で遂行されるのをたどっている。「宗教の危機」(第一章) という認識と「宗教の止揚」(第二章) という突破への方向が示される。ここではザーフェンヴィルの時代になされた600を越える説教が立入って検討され，これらの説教を基礎として書かれた『ローマ書』のテクスト理解に役立てられている。今までなすべくしてなされなかった仕事を著者は遂行したのである。

第三部から第五部までは，このような「主題」の展開が，さらに積極的に「倫理学」の問題としてとらえられる。教義学と倫理学を分離する二元論的傾斜を排して，「倫理学としての教義学」が提示されているという (278頁以下)。まず第三部では「倫理学の拠点」が「恩寵」に対する「服従」にあるとの立場から論じられる (第一章)。それによって近代主義神学における神学の倫理主義化を排して，真に現実的な神学的倫理学を設立する道が示される。そこから「神にある人間」の「対応行為」としての「証示行為」の倫理が成立するという (第二章)。第四部では「倫理学の構造」が「愛」の対応関係として，神の愛 (第一章) と隣人愛 (第二章) の両面から論じられる。さらに第五部では「倫理学の限界」が「神の自由」(第一章) と人間の「終末論的可能性」(第二章) として示される。

以上の諸点から，バルトの『ローマ諸』の思想内容そのものが，精細かつ徹底的に分析，解明さ

れている。

審　査　の　要　旨

本論文は，すでに述べたように，今日入手可能と思われるバルト『ローマ書』に関する研究書と研究論文のほとんどすべてを読破し，それに示された解釈を承認し，あるいは批判しつつ，この対話を手掛りとして『ローマ書』の内容そのものの解明を志した大著である。このような前人未踏の事業が遂行されたことは十分評価しうる。またそこから抽出された結論も，それぞれ妥当な解釈だといえる。

以上のような積極的評価に対して，それにもかかわらず，二，三の問題点を上げざるをえない。まず第一版と第二版をそれほどはっきり区別せずに，連続においてとらえるということはたしかに一つの見方ではあるが，第一版の宗教社会主義的な概念世界と第二版のキルケゴール，ドストエフスキー，ニーチェ，ブルームハルトといった実存的，終末論的概念世界の違いは，やはりくわしく検討されるべきであると思う。また研究的な文献を広く渉猟されたことは，たしかに評価しうるが，そのために立場または評価の違うものが並列されるきらいがあり，論述に首尾一貫を次くところが出てくる。その点内容的な評価と，それを取り上げる際の論述をさらに整理すべきであると考える。

以上のような問題点がのこされてはいるが，非常にむずかしいテキストをここまで分析し，多数の研究文献に当って，その成果をこのようにまとめた著者の研究努力と成果は学界に対する大きな寄与であると評価される。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格があるものと認める。